

## 鳥居きみ子宛坪井正五郎書簡

松永 友和

### はじめに

本稿は、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館（以下、「当館」と記す）が所蔵する資料「鳥居きみ子宛坪井正五郎書簡」を紹介するものである。同資料は、平成27年度の上半期に資料整理を進めるなかで見出され、「開館五周年記念企画展 鳥居龍蔵 ―世界に広がる知の遺産―」（会期：平成28年（2016）1月23日～2月28日）において初めて出品された新出資料である。同企画展図録（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編 2016）には、資料の一部が掲載されているが、紙幅の都合により書簡全体の写真や解説を付すことができなかった。そのため、ここで個別に取り上げることとする。以下、資料の概要や坪井正五郎の生涯、書簡の内容などについて、若干の解説を加える。

### 解 説

#### (1) 資料の概要

まず、資料の概要について述べる。資料は、坪井正五郎（1863～1913）が鳥居きみ子（1881～1959）に宛てた書簡である。法量は、縦17.9cm、横95.0cm、封筒（図1）も残されており、その大きさは縦19.5cm、横7.8cmである。資料目録（調書）によれば、大正2年（1913）2月1日に刊行された雑誌『新公論』第28年第2号（新公論社、大正2年2月1日発行）（当館蔵）に挟まれた状態であったという。

年代については、封筒の裏側に「二月十八日」とあり、封筒上部の消印（図2）に「□□／2.2.19／前10-11」、「麻布／2.2.19／后1-2」とあることから、大正2年（1913）2月18日にしたためられ、19日に消印が押されたことが判明する。当時、坪井正五郎は50歳、鳥居きみ子が32歳であり、このとき鳥居龍蔵（1870～1953）は42歳だった（年齢はいずれも満年齢）。坪井は同年5月26日にロシアで客死しており、死去する3ヵ月前の書簡ということになる。

#### (2) 坪井正五郎と父坪井信良

次に、書簡の差出人である坪井正五郎と、その父坪井信良（1823～1904）<sup>(1)</sup>について紹介したい。坪井正五郎は、文久3年（1863）正月5日に江戸両国の矢ノ倉（現、東京都墨田区）で生まれる。名前の「正五郎」は、この誕生日にちなみ付けられたという。父は蘭方医で幕府奥医師の坪井信良で、母の名はまき（牧）といった。正五郎の祖父坪井信道（1795～1848）も蘭方医であり、伊東玄朴・戸塚静海とともに江戸の三大蘭方医と称されたという。

正五郎の父信良は、文政6年（1823）に越中高岡の旧家佐渡家の8代目養順の二子として生まれる。未年に生まれたため幼名を未三郎、名を良益といった。家は代々婦人科医で、良益は蘭学を京の小石元瑞、江戸の坪井信道に学んだ。良益は師である坪井信道にその才能と人柄を見込まれ、信道の長女まきと結婚し、坪井信良と改名する。その後、信良は漢学を広瀬旭荘から、医学を緒方洪庵から学ぶ。信良とまきとの間には4人の子どもが生まれたが、その内3人が夭折し、唯一正五郎のみが成長した。正五郎が生まれた文久3年、父信良は福井藩16代藩主松平慶永（春嶽）の侍医として上京し、在京中の3月に医学所教授職に命ぜられるなど、忙しい日々を送っていた。翌年の元治元年（1864）8月に正五郎の弟甲子次郎が生まれたが、翌月に母まきは腹膜炎を起し、9月14日に亡くなる（享年31歳）。

信良は高岡にいる実兄佐渡三良宛の書簡に「号泣之外無之候」、しかし長男正五郎は、「何事ヲモ不知、乳母附置候故、却て来人之多クテゴタゴタスルニ喜居申候。是亦無我無心、可憐。」と書き綴っている（宮地 1978：233-235）。妻を亡くした悲しみのなか、11月には江戸幕府の奥医師となる。このとき、家禄200俵、役料200俵を給される幕臣となる。満1歳9ヵ月と当歳の2人の幼児をかかえての奥医師奉公は到底勤まらず、12月に幕府代官荒井清兵衛頭道（1814～1862<sup>(2)</sup>）の娘よのと再婚する。正五郎は義母よのに育てられる。

正五郎が生まれた文久3年（1863）から慶応4年（1867）の5年間は、まさに幕末の動乱期にあたる。将軍徳川家茂の上洛、長州藩外国船砲撃事件、薩英戦争、八月十八日の政変（以上、文久3年）、池田屋事件、禁門の変、第1次長州征討、四国艦隊下関砲撃事件（以上、元治元年）、薩長同盟、江戸・大坂での大規模な打ちこわし、第2次長州征討、徳川慶喜の将軍就任（以上、慶応2年）、明治天皇の即位、ええじゃないか発生、大政奉還、王政復古の大号令（以上、慶応3年）、鳥羽・伏見の戦い、江戸城無血開城（以上、慶応4年）など、政治・社会ともに混乱した状態であった。

父信良は幕府の奥医師として、幕末の政局を間近で目にし、その動向を高岡の兄に逐一書簡で伝えている。慶応4年1月には、鳥羽・伏見の敗戦により、徳川慶喜につき従い大坂で開陽丸に乗船し、東帰する。8月に、坪井家は徳川慶喜に同行し静岡に移住、信良は12月に病院頭並を仰せ付けられ、静岡藩70万石の医務行政に携わることになる。しかし静岡病院の閉局にともない、明治6年（1873）に坪井家は東京に戻っている。その後、信良は明治政府の職にはつかず、徳川家遺臣として過ごす。明治16年、還暦を迎えた信良は家督を正五郎に譲り隠居する。明治37年に81歳（満年齢）で病没した。

正五郎は、坪井家の静岡移住にともない5歳から10歳までを静岡で過ごす。東京に戻ったあとは、湯島小学校や東京英和学校などで学び、明治10年9月、14歳のとき東京大学予備門に入学する。同年にはアメリカの動物学者モースが大森貝塚を発見している。明治14年9月に、東京大学理学部に入学し、動物学者の箕作佳吉のもとで学ぶ。なお、のちに正五郎は箕作佳吉の妹直（直子）と結婚している。

明治16年は先述のとおり父信良が還暦を期に隠居し、20歳の正五郎が家督を相続する。翌17年3月には有坂鋳蔵・白井光太郎とともに本郷弥生町で発掘を行い、のちに「弥生式土器」と命名される土器を発見している。同年7月から8月の間には、越後・越中・能登・加賀・越前・若狭・丹後・近江・山城・摂津を1ヵ月半かけて巡り、動植物の採集などを行っている。正五郎の興味関心は動植物学にとどまらず、この旅行を期に人類学会設立への想いが固まったとされる<sup>(3)</sup>。同年10月、有坂鋳蔵・白井光太郎らとともに人類学会を創設し、第1回集會が開かれている。

明治19年7月、23歳の正五郎は帝国大学理科大学を卒業する。9月に人類学研究を目的に、新設されたばかりの大学院人類学科に入学する。しかし、人類学科が設立されたとはいえ、人類学を正式に教える教授がいたわけではなかった。そのため正五郎は、フィールドワークを通して直に学ぶほかなかった。このフィールドワークを通して学ぶ研究スタイルは、そのまま鳥居龍蔵に受け継がれることになる。正五郎は各地でフィールドワークを行い資料を収集するなかで、明治21年、鳥居龍蔵と出会う<sup>(4)</sup>。当時、正五郎は東京大学理科大学助手で25歳、龍蔵は18歳であった。

その後、明治22年から人類学を修学するためイギリス・フランスに3年間留学し、明治25年10月、帰国した正五郎は東京帝国大学理科大学教授に就任する。ほどなくして箕作佳吉の妹直（直子）と結婚する。翌26年9月に東京帝国大学理科大学教授として人類学講座を担当し、同月に長男誠太郎が誕生する。正五郎29歳のときであった。明治29年には自ら創設した東京人類学会の会長となり、人類学教室や人類学会を中心に、人類学の発展に尽力した。坪井正五郎が「日本で最初の人類学者」と呼ばれる所以である。明治32年2月、理学博士の学位を授与されている。

その後も正五郎は大学で人類学講座を担当するとともに、各地でフィールドワークを行い、研究を深めていく。のちに否定されるが、正五郎が唱えたコロボックル説（コロボックルを日本の石器時代人とする説）は、明治期の人種・民族論争に一石を投じることとなる。その他、各地で講演を行うかたわら、明治33年には国立博物館創設計画委員を委託されるなど、明治期の学術とその普及活動に貢献する。

大正2年(1913)、第5回万国学士院連合大会に出席するため、4月20日に東京を出立、5月3日にロシア北西部のサンクト・ペテロブルクに到着する。5月11～18日の大会出席の後、23日にアレキサンドリア病院に入院し、26日に同地で死去する。死因は実母まきと同様、腹膜炎(急性穿孔性腹膜炎)とされる。50歳であった。

### (3) 書簡の内容

次に、書簡の内容について紹介する(図3)。書簡は、大正2年(1913)2月18日に東京帝国大学理科大学の人類学教室で坪井正五郎自らが記したものと考えられる。宛先は鳥居きみ子<sup>(5)</sup>で、当時鳥居家は麻布区霞町1に住んでいた<sup>(6)</sup>。

本文に目を移すと、「龍蔵君の御様子は度々の御通信で承知、何時も御健全の事とお喜び申居ります」とある。このとき鳥居龍蔵は家を留守にしていたが、坪井とはたびたび連絡を取っていたようである。坪井は、鳥居が家を不在にしていたため、きみ子宛に書簡を投函したのである。

ここで、当該期における鳥居龍蔵について述べる。書簡が出される2年前の明治44年春、鳥居は第1回朝鮮調査を行い、同年7月には南樺太を訪れ調査を実施している。朝鮮調査はその後も続き、明治45年(1912、7月に大正と改元)に第2回、大正2年に第3回のように、大正5年の第6回調査まで継続して行われている<sup>(7)</sup>。大正2年3～4月には宮崎県知事の要請により、延岡や高千穂、高鍋などの古墳を、都農では日向国一宮の都農神社を、西都では西都原古墳などを調査している<sup>(8)</sup>。このように、坪井が書簡を記したとき鳥居は、朝鮮や宮崎県などにおいて調査に明け暮れていたのである。

さて、書簡の本題は人類学教室の移転を伝えることにあった。本文には「教室は先頃弥生町門の近くに移転致しました。其位置は左図の通り」とあり、簡単な図も記されている。興味深いのは、次の一節である。「此度は小室がいくつもあるので、私の居る室の隣を龍蔵君と石田君とに充て、置きました」とある。すなわち、移転先には「小室」(小さい部屋)が複数あり、坪井は自分の部屋の隣に、「龍蔵君と石田君」の部屋を割り当てていることがわかる。「石田君」とは、石田収蔵(1879～1940)を指す。石田収蔵は人類学教室初の大学院生として坪井に師事し、鳥居よりも9歳年下ながら坪井の学問を引き継ぐ存在と目されていた<sup>(9)</sup>。そのことは、坪井自身が鳥居と石田に部屋を分配している点に示されており、将来の人類学を担うべく存在として、両者に大きな期待を寄せていたことがわかる。書簡には、「お出序でがありましたら、御立ち寄り御一覽を願ひます」とあり、鳥居きみ子に対する坪井の気遣いが感じられる。

書簡のもう一つの目的は、雑誌『新公論』第28年第2号(新公論社、大正2年2月1日発行)(図4)を送付することであった。本文には、「別封「新公論」には、日本の人類学と云ふ事を記し、其中に御名前を出して置きましたから、御一見に供します」とある。坪井は自身が執筆した原稿「世界に劣らぬ日本の人類学」のなかで、鳥居龍蔵の名前を出したため、『新公論』を送ったのである。先述したように、本書簡が雑誌『新公論』第28年第2号に挟まれた状態で保管されていたのは、上記の理由による。つまり書簡は、雑誌『新公論』に収録された坪井の原稿と一体のものとして捉える必要がある。

### おわりに

以上、当館が所蔵する大正2年(1913)2月18日付の「鳥居きみ子宛坪井正五郎書簡」について、若干の解説を加えた。本資料は、坪井が大正2年5月にロシアで客死する3ヵ月前に記されたものであり、坪井が鳥居龍蔵ときみ子に送った最晩年の書簡である(宛先は「鳥居きみ子」だが、坪井は鳥居龍蔵が書簡を読むことを想定していたとみられる)。

最後に、書簡とともにきみ子のもとに送られた雑誌『新公論』第28年第2月号について触れることにしたい。そのなかで坪井は、以下のように書き記している。

体質の方面からも土俗の方面からも此台湾蕃人に付いて詳細の調査をされたのは鳥居龍蔵氏

で、其結果は大学記要其他に由つて普く世に発表されて居る。氏は千島土人の調査をも行はれた。樺太諸人種の事も日本人種の事も人類学教室員中に現に精しく調べて居る人が有る。事業進行中の事故之以上記すのは扣へて置くが、数年の中には纏まつた報告が公けされる事と信ずる。日本国内にも色々の種族が居るが、日本から行くに便宜の多い四囲の諸地方にも調査を要する様々の住民が居る。其一たる苗族に関しても鳥居龍蔵氏が立派な報告を書かれた。氏は夫人と共に長く蒙古に行つて居られたが其所でも人種的調査を遂げ、今は又満韓地方に於て研究に従事して居られる。

上記の記事は、坪井の原稿「世界に劣らぬ日本の人類学」のなかの一項目「人類研究の小金井氏と鳥居氏」のうち、鳥居龍蔵ときみ子に関わる部分である。当時すでに解剖学者・人類学者として著名であり、東京帝国大学医学部解剖学教授をつとめた小金井良精（1858～1944）とならんで、当時東京帝国大学理科大学講師の鳥居龍蔵が紹介されている。文中には、「数年の中には纏まつた報告が公けされる事と信ずる」とあり、坪井の鳥居への期待の高さが感じられる。鳥居の苗族に関する調査などにも触れ、さらに、「氏は夫人と共に長く蒙古に行つて居られたが其所でも人種的調査を遂げ、今は又満韓地方に於て研究に従事して居られる」と記し、鳥居がきみ子とともに調査研究に携わることによって大きな成果を遂げている、と坪井は認識していた。

このように坪井の原稿からは、鳥居龍蔵ときみ子に対する期待や想いが伝わってくる。一方、書簡からは、鳥居が調査先からたびたび坪井に連絡を行っていたことがうかがわれる。このころ鳥居は、白鳥庫吉らの東洋学会設立に協力したため、師である坪井や箕作佳吉らと不仲になり、関係に溝ができたとされている。しかし、坪井の書簡や原稿からは、師の弟子に対する想い、弟子の師に対する想いが伝わってくる。

鳥居が海外調査により長期不在にするなか、この書簡を受け取った鳥居きみ子の気持ちはどのようなものであつたらうか。鳥居は長期出張から帰宅したとき、ロシアで坪井が客死したことを知る。それと同時に、師の坪井が生前に書き留めていた、この書簡と原稿を手にしたとみられる。

#### 資料翻刻

（封筒表書）

麻布区霞町一

鳥居きみ子様

（消印）「□□／2. 2. 19／前10－11」

（消印）「麻布／2. 2. 19／后1－2」

（封筒裏書）

二月十八日

本郷理科大学

人類学教室にて

坪井正五郎

（本文）

まだ寒さが去りませんが、

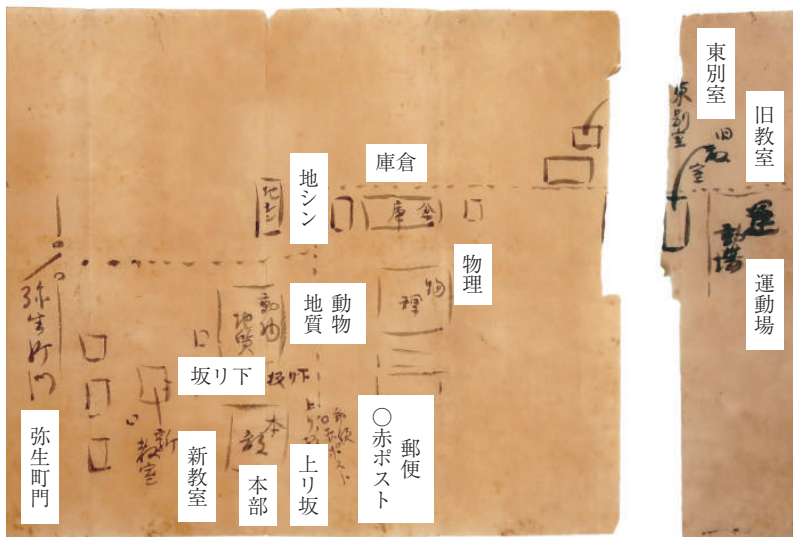
皆々様お障りもあらせ

られませんか。龍蔵君の

御様子は度々の御通



信で承知，何時も御健  
全の事とお喜び申  
居ります。此度も忝  
学術上有益なる御見  
聞ノ，多かりしならんと，  
其詳細を伺ふ時の  
近からん事を希望致  
し居る次第でございます。  
既に御聞き及びかとも  
存じますが，教室は  
先頃弥生町門の近  
くに移転致しました。  
其位置は左図の通り。



此度は小室がいくつも  
あるので，私の居る室の  
隣を龍蔵君と石田  
君とに充て、置き  
ました。お出序でが  
ありましたら，御立  
ち寄り御一覽を願  
ひます。別封「新公論」  
には，日本の人類学と云  
ふ事を記し，其中に  
御名前を出して置き  
ましたから，御一見に  
供します。御近況  
伺ひかたがた諸事取  
交ぜ一筆，如斯  
二月十八日 坪井正五郎  
鳥居きみ子様

## 注

- (1) 坪井信良については、宮地（1978, 1994, 2012）に依拠した。坪井正五郎については、坪井・斎藤（1971, 1972）、川村（2013）を参照。
- (2) 荒井清兵衛顕道は、奥州棚倉や甲州市川、奥州桑折、関東の代官を歴任した幕臣である。荒井の編著『牧民金鑑』22巻は、江戸初期から幕末までに出された法令を集成したもので、幕府の地方支配制度に関する基本史料として知られている。
- (3) 川村（2013：38）による。
- (4) 坪井と鳥居との出会いについては、鳥居（2013）、天羽（2011）参照。
- (5) 鳥居きみ子については、天羽（2013）が詳しい。
- (6) 鳥居龍蔵の住居の変遷を詳細に調査した守屋（2013a）によれば、鳥居家は明治44年8月に本郷区春木町2の21から麻布区霞町1に転居し、さらに大正2年5月に霞町1から同町21に移っている。書簡は大正2年2月のものであるため、転居の時期と封筒に記された住所は一致する。
- (7) 当時の鳥居龍蔵の動向については、鳥居（1977, 2013）参照。
- (8) 大正2年の宮崎調査については、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館（2014）、宮崎県立西都原考古博物館（2015）参照。
- (9) 石田収蔵については、板橋区立郷土資料館（2000, 2011）参照。石田を含め当時の人類学教室の動向については、守屋（2013b）参照。

## 参考文献

- 天羽利夫 2011 「鳥居龍蔵と「徳島人類学材料取調仲間」」『鳥居龍蔵研究』創刊号 鳥居龍蔵を語る会
- 天羽利夫 2013 「龍蔵と歩んだ鳥居きみ子の足跡と業績」『鳥居龍蔵研究』2 鳥居龍蔵を語る会
- 板橋区立郷土資料館編 2000 『石田収蔵—謎の人類学者の生涯と板橋—』板橋区立郷土資料館
- 板橋区立郷土資料館編 2011 『平成23年度秋季企画展 明治・大正期の人類学・考古学者伝—学者たちの絵葉書・絵手紙の世界—』板橋区立郷土資料館
- 川村伸秀 2013 『坪井正五郎—日本で最初の人類学者—』弘文堂
- 社会情報研究資料センター高度アーカイブ化事業編 2012 『坪井家関連資料目録』東京大学大学院情報学環附属社会情報研究資料センター
- 坪井正五郎著・斎藤忠編 1971 『日本考古学選集2 坪井正五郎集 上』築地書館
- 坪井正五郎著・斎藤忠編 1972 『日本考古学選集2 坪井正五郎集 下』築地書館
- 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編 2014 『企画展図録 鳥居龍蔵の国内調査—沖縄・南九州—』徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
- 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編 2016 『開館5周年企画展 鳥居龍蔵—世界に広がる知の遺産—』徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
- 鳥居龍蔵 1977 『鳥居龍蔵全集』別巻 朝日新聞社
- 鳥居龍蔵 2013 『ある老学徒の手記』岩波書店
- 宮崎県立西都原考古博物館編 2015 『西都原の100年 考古博の10年 そして、次の時代へ』宮崎県立西都原考古博物館
- 宮地正人 1978 『幕末維新風雲通信—蘭医坪井信良家兄宛書翰集—』東京大学出版会
- 宮地正人 1994 『幕末維新期の文化と情報』名著刊行会
- 宮地正人 2012 『幕末維新変革史 下』岩波書店
- 守屋幸一 2013a 「鳥居龍蔵の住居変遷について」『鳥居龍蔵研究』2 鳥居龍蔵を語る会
- 守屋幸一 2013b 「人類学教室時代の鳥居龍蔵とその人間関係」『鳥居龍蔵研究』2 鳥居龍蔵を語る会

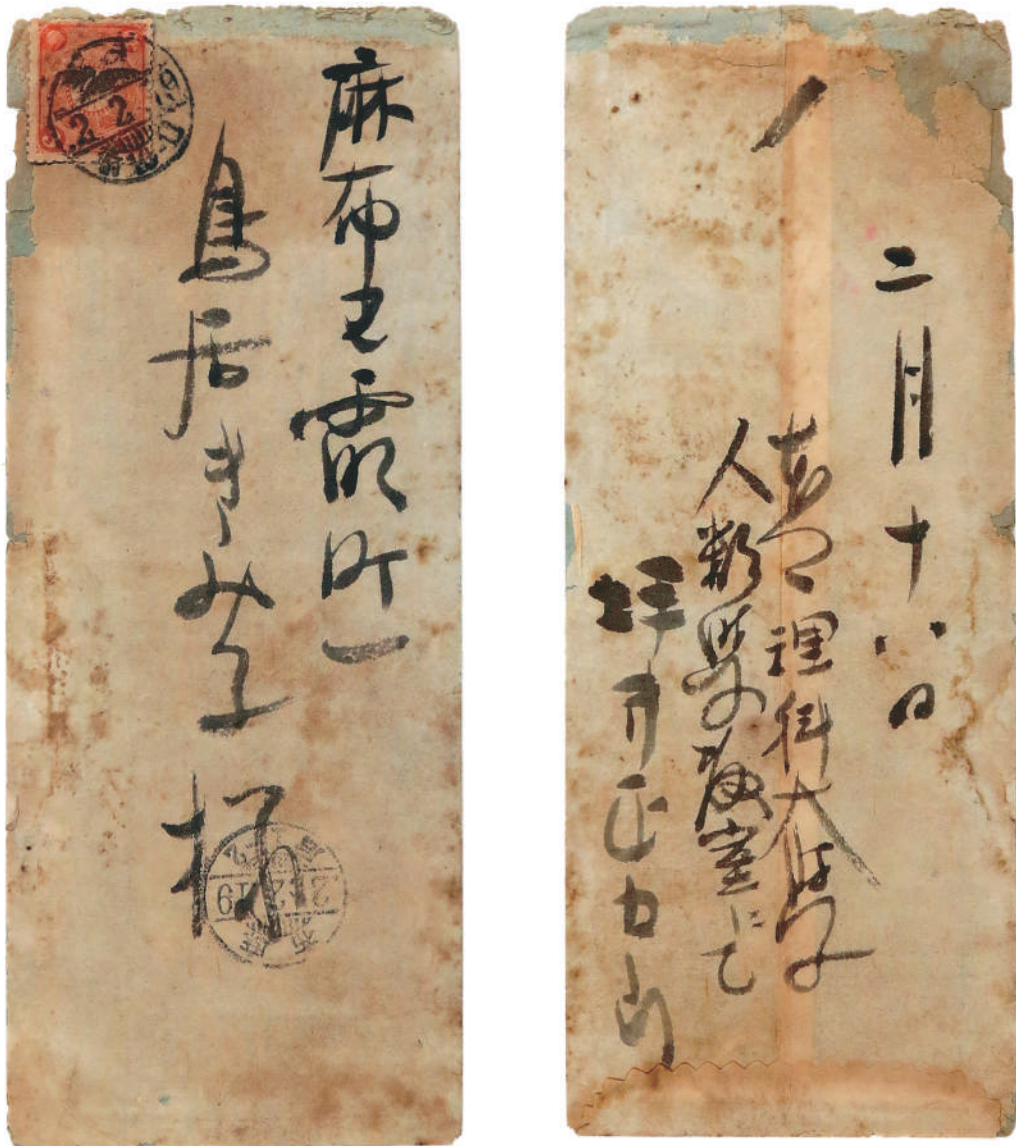


図1 封筒 (左:表, 右:裏)



図2 封筒 (表) の消印



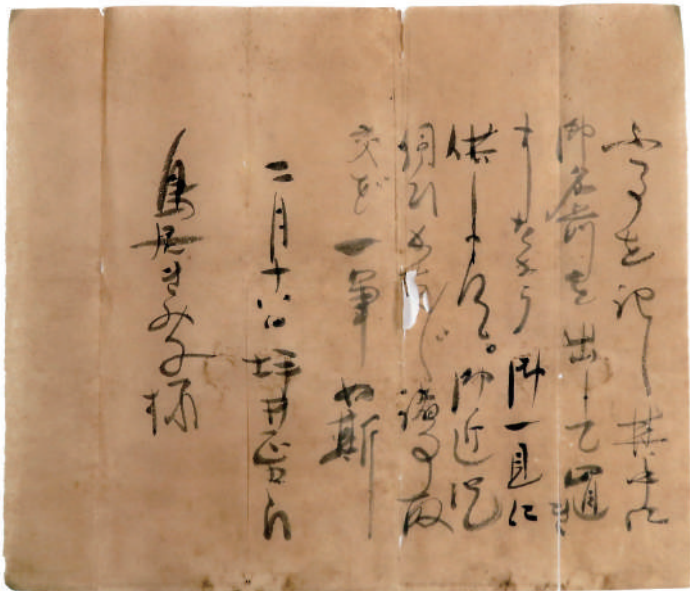


図3 書簡



居りり。いんし亦  
 此紙上有益なる所見  
 聞きさうし。と  
 其詳細を伺小所の  
 近し。しるを存望也  
 一。次。次。で。な。り。を  
 既。今。内。向。か。ひ。き。き  
 なる。よ。し。を。教。書。は  
 先。以。引。き。所。門。の。近  
 くに。移。転。せ。り。と。す。ら  
 其。位。置。は。左。圖。の。通  
 屋  
 田  
 原  
 別  
 室

小。老。寒。さ。を。去。り。ま。し。め  
 皆。に。好。む。障。り。を。し。を  
 り。を。し。を。龍。元。君。の  
 御。子。は。存。之。の。内。向  
 信。で。な。り。と。す。ら。は。健  
 全。の。事。と。す。ら。は。中

